

レバノンの舞台芸術

—『Jogging - Theatre in Progress』 観劇レポートを中心に—

アラブ映画研究者／慶應義塾大学 SFC 研究所上席所員

京都芸術大学通信教育部非常勤講師 佐野 光子

他のアラブ諸国でも同様かもしれないが、レバノンの人々は演劇をはじめとする舞台芸術に対する熱量が高いように思われる。首都ベイルートでは、いつ訪問しても何かしら興味深い舞台作品がそこかしこで上演されている。会場に足を運べば、筆者の研究対象である映画とはまた違った、ライブパフォーマンスならではの熱気が演者と観客の双方にみなぎっている。アラブ人が大半を占める客席から巻き起こる爆笑の渦の大きさや拍手の頻度、感極まった観客が時折発する叫び声は、行儀がよく大人しい観客が多い日本の観劇の場ではなかなか体験できないものである。この熱気の中に身を置く楽しさは忘れがたく、現地滞在中は足繁く劇場に足を運んでしまう。

そしてレバノンの舞台芸術は実に多彩である。欧米のアートシーンでも一目置かれるような、例えばレバノンを代表する劇作家・演出家にして俳優でもあるラビア・ムルエ（ラビーウ・ムルウェ）の実験的な作品群は、ローカルなテーマを扱いつつも、常に演劇という芸術形式を更新しようとする意欲と野心に満ちている。こういった知的に洗練された作品が定期的に上演される一方で、市井の人々が日常の暮らしの中で抱える喜びや悲しみ、不安や希望を描き出した作品も人気を博す。例えば、日本でもヒットしたレバノン映画『判決、ふたつの希望』で右派キリスト教徒の老獪な弁護士を演じた俳優カミール・サラーマがほぼ自作自演した『64』は、公務員の掃除係として長年勤務してきた男が最後の勤務日を迎え（「64」とは定年退職の年齢を示している）、後悔まじりにこれまでの人生を振り返りながら人生の苦さを浮き彫りにする作品であった。

しかしレバノンの舞台芸術はこういった演劇作品にとどまらない。レバノンを代表する劇団、カラカッラ舞踊劇団は1968年に結成されて以来、国内外で数多くのミュージカル作品を上演してきた。レバノン、さらには中東の伝統文化と欧米のダンス技術を融合させた絢爛豪華な舞台は観客を魅了し、今やレバノンにとって無くてはならない存在である。毎年夏に開催されるパールベック国際フェスティバルは海外から著名な楽団やアーティストを数多く招聘することで知られているが、その中にもカラカッラ舞踊劇団の公演には常に観客が殺到することからもその人気のほどがうかがえる。一方、ベイルートのハマラ通り沿いにあるメトロ・アル＝マディーナ劇場では、歌や踊り、寸劇やトークを盛り込

んだレビューショーが人気を博している。ユーモラスでありながらどこか退廃的で、ある時は艶笑で客席を沸かせ、またある時は軽妙なトークで観客をからかう。これぞ大衆娯楽演芸の見本とでも言うべき、エンターテインメント性あふれる舞台である。

このようにレバノンでは多種多様な舞台を楽しむことができるが、こういったレバノンの舞台芸術について網羅的にまとめることは限られた紙面では難しい。そこで本稿では筆者が近年観たレバノンの舞台の中で最も強く印象に残った、ある型破りな作品についてご紹介したい。



パールベック国際フェスティバルでのカラカッラ舞踊劇団公演カーテンコール（2009年7月 筆者撮影）



メトロ・アル=マディーナ劇場の演目の数々（2019年3月 筆者撮影）

筆者がハナーン・アル＝ハーッジ・アリーの一人芝居『Jogging - Theatre in Progress』を観たのは2019年3月、フランス文化センターでのことであった。開場時間となり客席に足を運んでふと舞台に目を向けると、黒い全身タイツのような衣装に身を包んだアル＝ハーッジ・アリーが照明に照らされた舞台の上に寝そべて準備体操をしていることに驚かされた。開場となった瞬間から既に彼女の作品は始まっていたのだ。ほどなくして正式な上演開始時間になると、彼女はアラビア語の子音「kh」（日本語では「ハ」音に近い）で始まる様々な単語を使って発声練習を始めた。しかしその単語が何とも不穏なのだ。「失望」「裏切り」「割礼」「台無しにされた」「糞」といった具合である。この時点で、この一人芝居がただならぬものを差し出そうとしていることが理解できた。



『Jogging - Theatre in Progress』上演前に舞台上で準備体操をする
ハナーン・アル＝ハーッジ・アリー（2019年3月 筆者撮影）

本作はエウリピデスのギリシア悲劇『メディア』を下敷きにしている。夫の裏切りに激昂したコルキス王女メディアがその復讐の一つとして夫との間にもうけた我が子を殺害するというプロットから、実の子を殺める母親のメタファーとして引用されることが多い。それは本作においても同様である。本作の登場人物は、アル＝ハーッジ・アリー自身、メディア、レバノン山地に住むイヴォンヌ、そしてレバノン南部に暮らすザハラ的女性4人である。この4人をアル＝ハーッジ・アリーが演じ分けるのだが、中でもイヴォンヌとザハラのパートに凄みがある。

イヴォンヌのエピソードは実際にあった事件がベースとなっているのだが、自宅に寄りつかない夫への復讐のために愛娘3人を毒殺し、自分自身も服毒自殺を遂げるという凄惨なものである。3人の娘に新調したばかりのパジャマを着せ、殺鼠剤入りのフルーツサラダを食べさせるくだりは背筋が寒くなるほどだ。一方、ザハラは戦争で失った3人の息子について切々と語る。上の2人の息子はレバノン南部でのイスラエルとの戦闘で命を落とし、3人目の息子はシリア北部で戦死する。いずれもシーア派組織ヒズボラ（ヒズブラー）が関わった戦闘であると考えられるが、同じシーア派であるアル＝ハーッジ・アリーがヒズボラがらみとも解釈できる殉教を批判的に描き出したことは、かなり思い切った大胆な踏み込みであると言えるだろう。いずれにしても、この作品には、我が子を「殺さ」ざるを得ない状況に女性たちを追い込む抑圧的なレバノン社会への絶望と怒りが満ち満ちている。

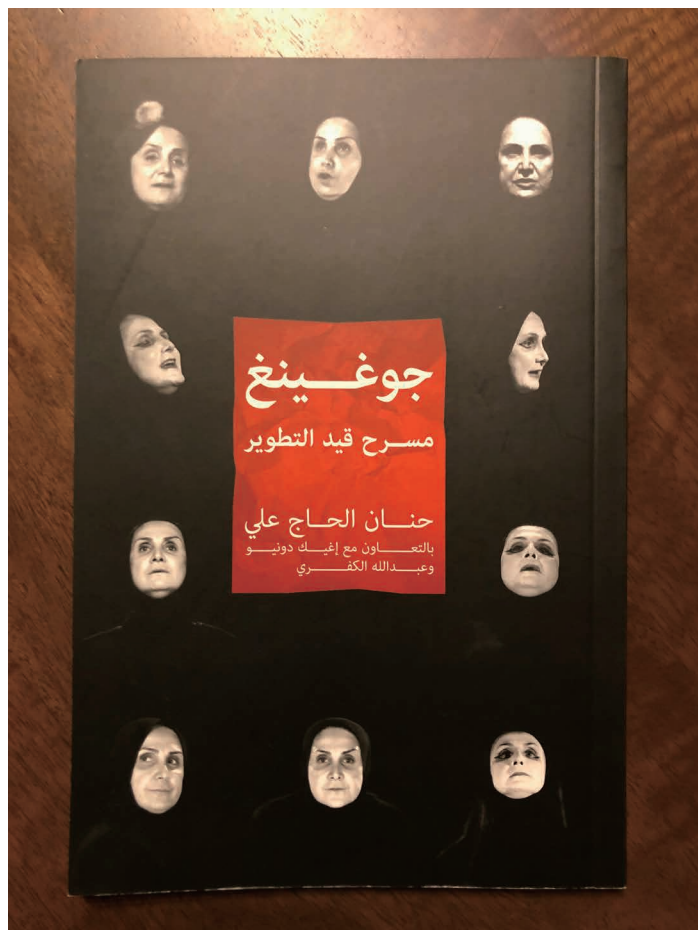
なお、念のため補足すると、この作品は上記のエピソードからイメージされるような陰惨で深刻な雰囲気終始包まれているわけではない。例えば、イヴォンヌが娘たちを毒殺するシーンでは実際に舞台上でフルーツサラダを3皿作り、「毒」（実際は蜂蜜）をかけたそれを客席の人たちに手渡して食べるよう勧めるなど、ユーモアに富んだ演出がなされているということも付け加えておこう。

ところで、劇タイトルに「Theater in Progress」という副題が入っているのには二つの理由がある。まず一つは、演劇とは継続的な営為であり、現在進行形で変化し、その変化を作品に取り込んで進化していくものだというアル＝ハーッジ・アリー自身の演劇観によるものである。そしてもう一つは、ずばり検閲対策である。レバノンでは、演劇や映画を制作する場合、事前に台本を治安総局に提出し許可を得る必要がある。そしてもし当局が不許可という決定を下した場合、不服申し立てをすることができない。アル＝ハーッジ・アリーは、本作がその内容の過激さから不許可となることを予想し、検閲を受けずに上演する方法を模索した。「Theater in Progress」、日本語では「進行中の演劇」「未完成の演劇」といった意味になるが、「これは未完成作品である」とタイトルに銘打つことで、人前で上演しても形式上は単なるリハーサルや練習風景の公開として捉えることも可能になる。さらに検閲対策という点では、公演チケットを無料にすることによって、法的な許認可がからむ興行という形態を回避した。その一方で、舞台の台本をアラビア語・英語・フランス語で収録した小冊子を有料で販売して幾ばくかの収益を得るという工夫もしている。出版物に対しては演劇に課せられるような事前検閲がないからだ。

このように、検閲の網をかいくぐるための仕掛けを周到に施しつつ、アル＝ハーッジ・アリーはレバノン国内の様々な地域で100回以上の公演をしてきた。ただし、公演の舞台は正規の劇場ではない。アートギャラリーやアトリエ、公立の学校や文化センター、さらにはパレスチナ難民キャンプやシリア難民キャンプなど、劇場以外の様々な場所が上演会

場となった。もちろん、それでも罰金刑や投獄のリスクはゼロではない。また、国内での反響は賛否両論で、彼女の作品は殉教を冒瀆するものだと脅迫を受けたこともあるという。しかし彼女は決して怯むことなく、半ばゲリラ的に公演を続けてきた。また、レバノン国内だけでなく、エディンバラやシンガポール、アメリカのケネディー・センターなど、多くの海外公演を行い現地で高い評価を得ている。コロナ禍の昨年秋にはスイスのチューリッヒにまで飛び、2週間の隔離生活を経て本作を上演するなど、その情熱はとどまるところを知らない。実際、筆者がアル=ハーッジ・アリーの舞台を観た2019年の時点で既に彼女は還暦を迎えていたはずであるが、とてもそうは思えないほど若々しく強力なエネルギーが舞台に立つ彼女の心身から放たれているように感じられた。

現在レバノン経済は破綻状態にあり、物資は不足し、住民の半数以上が貧困状態に陥っている。外貨不足のせいで燃料の調達にも支障が出ており、計画停電のため自家発電装置を持たない家庭では1日に数時間しか電気を使用できず、ガソリンスタンドには長蛇の列ができています。未曾有の危機的状況の中で、いまは舞台芸術どころの話ではないというのが、レバノンに暮らす人々の偽らざる気持ちであろう。しかしながら、かの地のアーティストや舞台表現者たちはこの過酷な経験ですらも自らの創造の糧にしようとしているのではないかと想像する。アル=ハーッジ・アリーのように勇敢でたくましい表現者はきっとまだ他にもいるだろう。安易に未来を楽観視することは憚られるが、それでもなお、いつかまたベイルートの劇場がああ熱気で満たされる日が来ることを願ってやまない。



『Jogging - Theatre in Progress』のブックレット
舞台の台本がアラビア語・英語・フランス語で収録
されている（筆者撮影）